

〈梅津純子歌集『白き川』を読むA〉

志縁の人たち、沖繩、風土を詠う

小野澤繁雄

「山麓」所属の著者の第二歌集。三十五年になるという歌歴。前歌集から十四年経過、その期間の歌で、六四〇首を収めたもの。改めて旧かなでまとめることをした。多くの人との出あい（と別れ）、そのうちとくに志縁しえんの人たちとの関係が思い深く詠われた。これが印象の一つ。フクシマ、沖繩に関係する歌々。著者は「小さな声の側から社会を見つめてきた」という、その一人、したがってどれも人の間の、歌数ほどに行動的で、しっかりとした歩みをみせている歌。

仙台の駅前にバス待てば列の長きに若者ばかり

一人始めし「太陽の子」上映運動を共に担ひき母のごとくに

風土、家族、またその現在が詠われて、それぞれに印象深い。疎開、朝ドラでしられる登米市に育ち、のち結婚で山形県に住むようになった。米沢市、ついで長井市在住、これで人生の半分という。仙台で銀行員をしていた時期もある。手堅い表現、伝わるもののある歌集だとおもう。

スキー疲れを顔には出さず笑みつくり銀行員の週の始まる

降る雪を流るるごとく風運ぶ二階の窓を白き川ゆく

〈梅津純子歌集『白き川』を読むB〉

雪国から沖繩に思いを馳せる

布宮慈子

まず思ったのは、この時期によくまとめたものだなあ、ということだった。作者はここ数年、体調がすぐれない様子だったから、歌集を編むというその集中力に驚かされた。また、長く新かな遣いで作歌してきたのに、全部を近年始めた旧かなに統一したというのにもびっくりした。しかし、あとがきを読んで、その並々ならぬ心情を理解した。

降り続く雪に籠れる厨べに芹の一把のみどり明るし (P28)

手作りのメッセージ掲げ歌ひゆく二万の叫び「およなら原発」(P55)

てんたう虫と蛹二つを茄子の葉にそつと包みて自然農の友来 (P97)

藤の花桐の花咲き朴の花終はりて峡はただ深緑ふかみどり

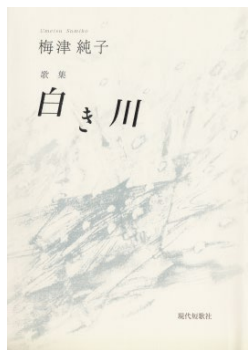
「ゆるぎなき希望」の文字に背筋伸ぶ辺野古の浜の座り込み日記 (P186)

降る雪の風にさらはれ流れゆく部屋内にみる空中の川 (P199)

独り倒れ逝きたる友の面穏し戦阻まむ思索の一生ちやう (P214)

河内愛子さん逝く

間をおいてとつとつ語る言の葉のユーモア鋭さ比類なかりし (P215)



ターザンロープ端から端まで試さむと再び向かふ街の公園 (P230)

水雨から霰となりて雪となるこの地を忘る秋空澄めば (P243)

夫と兄の調査にかけし十五年大伯父の伝記つひに世に出づ (P247)

『カナダ移民のパイオニア 佐藤総右衛門物語』

赤き実を挽いで舂<sup>さ</sup>して剥<sup>む</sup>いて干す祝祭のごと柿の秋ゆく (P259)

印象に残った歌を選び、十二首に絞ってみた。作者は若いときに沖繩復帰前にもかかわらず、たいへんな思いをして沖繩のペンフレンドに会いに行く。その情熱たるや、すごいものがある。行動力はいろいろな場で発揮されてきた。灰谷健次郎の「太陽の子」の上映、原発事故のあった福島へ行き原発反対の集会に参加すること、理不尽な私たちで米軍が駐留するの沖繩への思いから、沖繩に関する映画の上映等々、どうやって成し遂げてきたのだろうと思う事柄ばかりだ。だが、終盤になると大伯父のカナダ移民の歌が出てくる。この大伯父のパイオニア精神が作者に受け継がれ、同じ血が流れていることをわたしは疑わない。ターザンロープへの再挑戦の歌は、年齢よりずっと身体が若く動きたくて仕方がないという感じで、お茶目な性格を表している。

歌集には辞書にはない「志縁<sup>しえん</sup>」という語が出てくる。「志縁」は女性史研究者・もろさわようこさんが生んだ言葉。高齢のもろさわさんに取材が続いている人がいる。その信濃毎日新聞記者・河原千春さんの解説によると「ジェンダーという概念が入ってくる前から、もろさわさんは『男らしさ女らしさは生まれつきのものではない。社会的につくられたものだ』と発言していました。地縁、血縁でなく生き方、志。

志縁。それこそが人間の自由につながるという考え方です」。もろさわさんは信州、沖繩、高知に拠点をつくり、女性や被差別部落、沖繩など、一貫して差別される側に立ち、在野で行動してきた人だ。作者は、もろさわさんの言葉に影響を受け、それが生き方のベースにあると思われる。

山形県は雪国である。南西部の置賜<sup>おきたま</sup>地方は、北部の最上地方に次いで雪の多いところである。宮城県で育った作者にとつて、逃れようのない雪は苦痛だったかもしれない。歌集の題名になった「白き川」は次に置かれた歌を見ると「空中の川」なのであった。しかし、長井の地に根を下ろし、四季の草花を丹精込めて育てながら生きてきた作者。また自宅の柿の木から挽いでつくる干し柿はプロかと思うほど上手だ。なんでも手を抜かない作者像がここでも浮かび上がる。

選んだ歌のうち何首かは、わたしが約十二年前に山形に戻ってから知り合った人たちの歌である。故郷とはいえ、幼なじみはいても友達は一人もない状況だった。作者をはじめ知り合いになった人たちがいたからこそ、自分は寂しい思いをすることなく暮らしてこれた。とりわけ故河内<sup>こうち</sup>愛子さんには思いが強い。河内さんとの付き合いが長かった作者も同様だろう。河内さんはご高齢ながら読書量がすごかった。「独り倒れ：」と「間をおいて：」と二首を取り上げてみた。河内さんには友人知人、ケアマネさんや生協の職員までファンが多く、いつも誰かしら訪れる人がいた。独りのときに亡くなられたのだが、最後まで自宅で過ごしたことは立派だと思う。わたし自身が河内さんについて作歌できなかったぶん、歌集の河内さんの歌をオマージュとして、深く心にとどめたのであった。